【論文】

『梅光言語文化研究』第５号（2014年）pp. 1・38
@2014年　梅光学院大学国際言語文化学会

英語談話標識の諸相（1）

—英語談話標識研究の変遷—

松　尾　文　子・廣　瀬　浩　三

We deal with aspects of discourse markers in English and our discussions on them are mainly divided into two parts: as the theoretical part, we trace the vicissitudes of studies on discourse markers in English in this paper and the practical part is concerned with the analytical viewpoints for their full descriptions, which will be discussed in the following separate paper. The organization of this paper is as follows: the review of the treatment of discourse markers in modern linguistics in section 2; the introduction of the major research approaches in section 3; the relevance-theoretic analysis in section 4; the current Fraser's approach in section 5; the studies from a historical pragmatic perspective in section 6. Finally, we summarize the previous theoretical approaches to discourse markers in English.

キーワード：　談話標識　先行研究の変遷　談話標識研究アプローチ

1．はじめに

本論では、談話標識（discourse markers）と称される一連の言語表現の諸相を取り上げ、これらが言語研究の中でどのように扱われてきたのか、それぞれの分析とアプローチを振り返り、基本的な考え方を整理すると共に、改めて談話標識の特徴を抽出し、どのような観点から記述分析すべきか、具体例を提示しながら論じる。[1]

談話標識に関する体系的な研究の前半部に当たる本稿では、談話標識研究の理論編として、まず現代言語学の流れを簡単に回顧しながら、それぞれの時期で談話標識がどのように話題となったかを見ていく。次に、これまでの主要な談話標識分析のアプローチを紹介し、それぞれのアプローチにおける談話標識の基本的な位置づけをまとめ、その評価を示す。さらに、談話標識を理論言語学の表舞台に登場させるきっかけとなった関連性理論に焦点を当て、中心的役割を果たした Blakemore の研究を追いな

がら、関連性理論における談話標識の考え方を議論する。次に、現在、談話標識研究の中心的存在であるFraserの枠組みをまとめる。最後に、特に1995年以降に大きな展開を見せている歴史語用論の観点を紹介する。

なお、別稿において、談話標識研究の実践編にあたる後半部では、談話標識の特徴を改めて抽出し、具体例を挙げながら分析の様々な観点を整理し、今後の談話標識研究の方向性を示す予定である。

2．現代言語学の発展と談話標識

まず、談話標識を巡る様々なアプローチを回顧する前に、現代言語学の発展の中で談話標識がどのように注目され、分析されたかを概観したい。

現代言語学の父祖と言われるSapirやBloomfieldによる先駆的な研究を経て、1950年代に構造言語学が登場し、現代言語学が科学の一分野として位置づけられた。1950年代後半、Chomskyによって言語科学の状況が一変する。彼を中心とする生成文法では、理想的な話し手・聞き手の言語能力（linguistic competence）の解明を目指して文が主たる分析対象となり、言語の生成にかかわる規則や原理の体系化が図られた。

一方このような流れと平行して、米国において1960年代後半からHymesを中心に「ことばの民族誌」（ethnography of speaking）という幅広い観点から言語を分析する方向性が打ち出され、生成文法が言語能力（linguistic competence）の解明を目指し、言語運用（linguistic performance）の解明は後回しにされたのに対して、言語伝達能力（communicative competence）そのものの解明を主たる研究目標とした考え方が提唱された。この考え方に沿って社会言語学的見地を取り込んだSacks, Schegloff, Jefferson, Laborなどの一連の研究を通して会話分析（conversational analysis）が発展した。会話分析では、発話の順番取り（turn-taking）や会話の構成が問題となり、発話の順番取りを合図したり会話構成の一端を担う談話標識の働きが注目されるようになった。このような会話分析的アプローチの研究成果としてSchiffrin（1987）が出て、談話標識自体の関心が高まることになる。

一方英国においては、哲学者Wittgensteinの考え方に端を発して日常言語学派による言語研究が進められ、1960年代から、特に1970年代から、AustinやSearleによる発話行為理論（speech act theory）やGriceの研究を経て語用論（pragmatics）が確立した。語用論の研究においては、広く話し手・聞き手の知識体系を踏まえた意味解釈が論じられたが、その枠組みで提唱された慣習的含意（conventional implicature）や会話的含意（conversational implicature）との関係や、それらを司る様々な公理

(maxims) との関わりで、談話標識の働きが注目されることになる[Grice (1975/1989)、Levinson (1983)]。

また英国において、Hallidayの独自の言語観に立った体系文法 (systemic grammar) が打ち出され、後に機能主義文法 (functional grammar) としてまとめられた文法理論では、節や文を超えたレベルを射程に入れ、テクスト分析に目が向けられた。そうした研究の一環として位置づけられるHalliday & Hasan (1976) は、結束性 (cohesion) を中心概念に据えて具体的なテクスト分析の手法を示し、接続関係を担う談話標識の研究が初めて体系的に行われた。また、Van Dijk (1977, 1979) も初期の体系的な談話研究として注目される。ここでは、接続語が語用論的連結語として用いられることがあり、その場合当該の語の意味論的条件が語用論的妥当性の条件の基礎になるとする。その後、発話行為理論とテクスト分析の手法を融合させた形で、談話分析 (discourse analysis) が言語学の一分野として定着し、CoulthardやEdmondsonなどによって研究が進んだ。このアプローチの特色の1つとして、すでに取り上げた会話分析と同様に、フィールド・ワークによって得られた会話資料を言語資料としたことが挙げられる。この資料をもとに、談話の構成 (organization) や型 (pattern) の理論を立て、談話標識がそれらに関わると考えた。さらに、IT機器の発達に伴って膨大な資料を蓄積することが可能になり、資料の分析手法を理論的にまとめたコーパス言語学 (corpus linguistic) が発展して、ヨーロッパにおいても談話分析が浸透して行った。大規模コーパスの利用によって談話標識の共時的記述研究が進む一方で、歴史的コーパスの利用によって通時的な研究も可能になり、歴史語用論 (historical pragmatics) の視点からの分析が進みつつある。

1980年代に入って、Chomskyが生成文法をさらに精緻なものにするため理論構築を進める中、理論言語学は様々な方向へ分化していき、語用論もGriceの考え方を中心とした立場から、様々な方向へ分岐して行った。こうした言語理論が入り乱れる状況で、1980年代半ばから人間の認知能力を基盤にした新たな言語理論が登場し、新しい言語研究の潮流となっている。その1つが英国におけるSperberとWilsonによる関連性理論 (relevance theory) である。一方米国では、同じ認知能力に立脚した言語理論でも、全く異なる文法観に立脚したLangackerを旗頭とする認知文法 (cognitive grammar) が現れた。また、Lakoffを中心とする認知意味論 (cognitive semantics)、FillmoreやGoldbergなどによる構文文法 (construction grammar) などが次々と提唱され、さらに生成文法の流れを汲む認知的な言語研究として、Jackendoffの概念意味論 (conceptual semantics) も言語研究の1つのアプローチとして確立して現在に至っ

ている。特に、認知語用論とも称される関連性理論において「言語的意味」(linguistic meaning) を規定していく中で、Blakemore などが談話標識を取り上げ、理論言語学の中で中心課題の１つとして談話標識の分析に関心が集まっている。

こうした研究が次第に集約されて、1990 年代には談話標識そのものに焦点を当てた研究書や研究論文が次々と出て、談話標識が言語研究の課題の１つとして定着したことが窺える [Brinton (1996), Jucker & Ziv (eds.) (1998), Carston & Uchida (1998), Rouchota & Jucker (1998), Lenk (1998), Schourup (1985, 1999, 2000, 2001, 2011), etc.]。

そして今日、もっぱら談話標識に絞って研究を進める学者も現れ、その代表格の Fraser は、談話標識の詳細な分類を提示し、体系的な研究を進めている [Fraser (1990, 1996, 1999, 2006)]。また、Aijmer はコーパスに基づいた分析の重要性を説き、最近では社会的、文化的、地域的要因やテクストのタイプも視野に入れて、独自の言語変異的語用論 (variational pragmatics) の立場から談話標識の研究を展開している [Aijmer (2002, 2011, 2013)]。

以上、駆け足で欧米の言語学の流れを辿りながら談話標識の研究状況に言及し、マイナーな周辺的要素であると見られがちな談話標識が、文レベルを超えた単位を対象とする言語研究の潮流の中で、脈々と研究が継続されてきたことを示した。以下、一部前後する部分もあるが、可能な限り時系列的に談話標識研究の各アプローチについて詳しく見ていく。

３．談話標識研究を巡るさまざまなアプローチ

本節では、テクスト文法的アプローチ、会話分析的アプローチ、コーパス言語学的アプローチ、そして語用論的アプローチを順に取り上げ、談話標識についての基本的概念及び分析方法について概観する。

3.1. テクスト文法的アプローチ—Halliday & Hasan (1976)

談話標識研究の初期の段階で、談話標識をまとまった形で取り上げ、詳細な記述的研究をしたものとして Halliday & Hasan (1976) がある。そこでは、以下のように定義される結束性 (cohesion)、あるいはもう少し幅広く首尾一貫性 (coherence) を中心的な概念として、テクスト分析が進められた。

Cohesion occurs where the interpretation of some element in the discourse is

dependent on that of another. The one presupposes the other, in the sense that it cannot be effectively decoded except by recourse to it. When this happens, a relation of cohesion is set up, and the two elements, the presupposing and the presupposed, are thereby at least potentially integrated into a text.（結束性は、談話のある要素の解釈が他の要素の解釈に依存している場合に生じる。１つの要素が他の要素の前提となり、その一方の要素が他の要素に依存することなしに、効果的に解釈されないということである。こうしたことが生じる際に、結束性の関係が成立し、その２つの要素、すなわち前提となる要素と前提にされた要素が、少なくとも潜在的には統合されて１つのテクストを形成する。）

(Halliday & Hasan 1976：4)

本稿で問題とする談話標識は、Halliday & Hasan の枠組みでは、結束性を担う文法的手段として位置づけられる。さらに詳しく言うと、結束性を担う主な文法的カテゴリーとして、指示（reference）、代用（substitution）、省略（ellipsis）、接続（conjunction）が挙げられているが、談話標識は接続的関係を表すカテゴリーの中で詳しく記述される。[2]

Conjunctive elements are cohesive not in themselves but indirectly, by virtue of their specific meanings; they are not primarily devices for reaching out in the preceding (or following) text, but they express certain meanings which presuppose the presence of other components in the discourse.（接続的要素はそれ自体に結束性があるのではなく、間接的にその要素が持つ特定的な意味によって結束性を持つに至る。すなわち接続的要素は、本来的には先行する、あるいは後続するテクストに広がっていく言語手段ではなく、談話の中の他の要素の存在を前提としてある種の意味を表しているのである。）　(Halliday & Hasan 1976: 226)

Halliday & Hasan では、上記の接続関係が additive（付加）、adversative（反意）、causal（因果関係）、temporal（時間関係）の４つのタイプと、さらにこれらの範疇に入らないがテクスト内で結束性を保つ雑多な項目として continuative（継続）に下位区分される。[3] これらの接続関係を合図する標識として、接続詞などと共に談話標識が論じられている。個々の談話標識についても基本的な働きや特定の文脈における興味深い分析が行われているが、分析対象として使用したテクストが L. Caroll の *Alice in*

*Wonderland*に限られ、主として書き言葉における談話標識の分析に留まっており、談話標識の一部の機能を記述したにすぎない。しかしながら、中心概念とした首尾一貫性は談話分析の基本的概念となり、その後の研究に大きな影響を与えていくことになる。[4, 5]

1. Additive（付加）	*and, furthermore, in addition; nor; or,* etc.
2. Adversative（反意）	*yet, though, but, however, nevertheless,* etc.
3. Causal（因果関係）	*so, then, therefore, because,* etc.
4. Temporal（時間関係）	*then, next, finally, at last,* etc.
5. Continuative（継続）	*now, of course, well, surely, at all,* etc.

表１：接続関係（conjunctive relations）の分類

3. 2.　会話分析的アプローチ

米国や英国において、「生の資料」（authentic data、naturally occurring data）を分析対象とする談話分析、あるいは会話分析の中で談話標識が注目され、談話標識に焦点を当てた研究も出てきた。初期の時代の代表的なものとして Schourup（1985）と Schiffrin（1987）を取り上げ、概要を見ていく。

3. 2. 1.　Schourup（1985）

Schourup（1985）では、談話標識は「話し手の発話時点における思考状態を明示するもの」（evincive）で、話者の私的世界（the private world of the speaker）、話し手・聞き手の共有世界（the shared world of the speaker and hearer）、他者世界（the other world）の３つの「世界」に関わるとする。それぞれの「世界」については、以下のように説明されている。[6]

The covert thinking of the speaker, what the speaker has presently in mind but has not disclosed, will be referred to below as *the private world*; what is on display as talk and other behavior on the part of conversants and is thus available to both the speaker and any other(s) will be called *the shared world*; and the covert thinking of other conversants, which is inaccessible to the speaker, will be called *the other world.*（話し手の隠在的思考、すなわち、現在話し手が頭

の中に持っているがまだ開示していないものは、以下「私的世界」と称されるものである。会話参与者に談話やその他の行動として明示され、それゆえに、話し手と他者に入手可能なものは「共有世界」と呼ぶ。また、他の会話参与者の隠在思考は、話し手には接近できないものであり、「他者世界」と呼ばれる。）

(Schourup 1985: 7)

談話標識と「世界」との関係については、Schourup（1985）の結論部分で以下のようにまとめられている。

Each of the items discussed is used, generally speaking, to relate to what is covert to what is overt in ongoing conversational activity. The relationships involved here have been described in terms of three 'worlds' : the one known to the speaker alone, that known to the addressee(s) alone, and the world known to both. The disclosure problem may in individual cases involve the incongruity between what is shared and what is private, the invisibility of the other world to the speaker, the incongruity between what is presumed to be in the other world and what is in the private one, and so on.（議論されたそれぞれの項目は、一般的に言えば、継続する会話の中で隠在的なものを明示的なものに関係づけるのに使用される。ここに含まれる関係は、以下の３つの「世界」の観点から記述されるものである。すなわち、話し手のみが知る世界、聞き手のみが知る世界、その両者が知る世界である。開示に関する問題は、個々のケースにおいて共有されるものと私的なもの、そして話し手に見えない他者の世界の物事との間における不一致、すなわち、他の世界で前提とされることと私的世界にあるもの間の不一致などを含むものとなろう。）　(Schourup 1985: 154-55)

以上のような枠組みで *like*、*well*、*y'know* が詳しく分析され、この他 *now*, *I mean*, *mind you*, *sort [kind] of*, *and everything*, *and stuff* や間投詞についての個別分析が行われている。

Schourup（1985）の研究はいくつかの個別の談話標識についての記述的研究として価値のあるものとなっており、また独自の言語観、あるいは「世界観」で談話全体を司る概念を一般化しようとしたところにも特徴がある。Schourup はその後も独自に談話標識研究を進め、日本で早い時期に Schourup & Waida（1988）を出版すると共に、

Schourup（1999, 2000）などにおいて、談話標識の体系的研究を進めている。

3. 2. 2.　Schiffrin（1987）

Schourup（1985）の後に、会話分析の叡知を結集して本格的な談話標識研究となったSchiffrin（1987）が出版された。その中で、談話標識は以下のように定義されている。

> I operationally define markers as sequentially dependent elements which bracket units of talk.[7]（機能的な観点から、談話標識を談話単位をカッコでくくって（区切って）、前の要素に連続的に制約を受ける要素と定義する。）
>
> (Schiffrin 1987 : 31)

この定義の背景的な理論として、次のような首尾一貫性（coherence）に基づく言語観がある。[8]

> The analysis of discourse markers is part of the more general analysis of discourse coherence—how speakers and hearers jointly integrate forms, meanings, and actions to make overall sense out of what is said.（談話標識の分析は、談話の首尾一貫性に関するより一般的な分析の一部である。すなわち、話し手と聞き手が協力して言語形式、意味、行為を統合し、発話された内容から全体的な意味を形成する方法についての分析の一部分である。）　(Schiffrin 1987 : 49)

Schiffrin（1987）では、談話標識は「談話の文脈的調整を担うもの」（contextual coordinates of talk）と規定され、観念構造（ideational structure）、発話行為構造（action structure）、発話交換構造（exchange structure）、参与者の枠組（participation framework）、情報状態（information state）の５つのレベル（plane）で機能するものとして記述される。

第１の機能レベルでは、ある言語表現は談話的に何らかの結束性及び指示的関係を表すが、基本的には観念構造を形成し、談話標識は観念構造を論理的に結びつける。第２の機能レベルとして、発話は文脈的に何らかの発話行為を表し、発話行為構造を形成する。この機能レベルでは、談話標識と発話行為との関連が考察される。第３の機能レベルとして、発話が組み合わさって会話の順番連鎖（turn sequences）を形成

し、発話交換構造を生み出す。談話標識はもっぱらそうした発話交換構造と関わりを持ち、その機能を果たす。こうした談話機能の前提となる首尾一貫性には、談話の生産者及び受容者、そしてその知識体系も関与しており、話し手・聞き手の関係を参与者の枠組として、談話構造の第４の機能レベルを設定している。最後に、参与者が持つ発話と関連した背景的なメタ知識を情報状態として、談話モデルに組み入れている。

この談話モデルは会話分析の手法を取り、言語は常にコミュニケーションの場で用いられ、文脈によって影響を受けるものと捉えられており、言語構造はこうしたコミュニケーションを反映したものである。設定されている５つの機能レベルの背後には、談話の隣接単位の関係を通して構築される首尾一貫性の概念があり、それぞれの機能レベルは、独自のタイプの首尾一貫性を表し、個々の談話標識がその首尾一貫性にどのように寄与するかを合図することになる。

以上の分析によって明らかにされたことは、極めて基本的なことであるが、談話（会話）はランダムに生産されるものではなく、何らかのパターンを形成すると共に、コミュニケーションに貢献するということである。そうしたコミュニケーションのプロセスの中で、談話標識が大きな役割を果たしていることが明らかにされたのである。[9]

具体的な項目としては、*oh, well. and. but* 及び *or. so* と *because. now* と *then*（時を表す副詞）, *y'know* と *I mean* をそれぞれの機能と関連づけて分析している。以下、分析結果を一覧で示すが、星印（*）はその該当するレベルにおいて主たる機能を果たすことを表している。

情報状態	参与者の枠組	観念構造	発話行為構造	発話交換構造
**oh*	*oh*		*oh*	
well	**well*	*well*	*well*	*well*
		**and*	*and*	*and*
		**but*	*but*	*but*
		**or*		*or*
so	*so*	*so	*so*	*so*
because		**because*	*because*	
	now	**now*		

then		**then*	*then*	
I mean	**I mean*	*I mean*		
**y'know*	*y'know*	*y'know*		*y'know*

表２：機能レベルと談話標識との関係（Schiffrin 1987: 316）

なお、Schiffrin（2001 / 2004）では、談話標識は以下のように再定義されている。

Discourse markers—expressions like *well*, *but*, *oh* and *y'know*—are one set of linguistic items that function in cognitive, expressive, social, and textual domains.（談話標識（*well*, *but*, *oh*, *y'know*のような表現）は、認知的、表出的、社会的そしてテクスト的な領域で機能する一連の言語項目である。）

（Schiffrin 2001 / 2004: 54）

認知的領域とは、言語を通して概念や思考を表現する領域、表出的領域とは、言語を使って個人及び社会的なアイデンティティを示し、態度を表明して何らかの行為を行う領域、社会的領域とは、自己と他者との関係を調整する領域、テクスト的領域とは、単一の文より大きな言語単位内で形式を整えて意味を伝達する領域のことを言う。このように、談話標識は上記の４つの領域で機能するものとして捉えられ、Schiffrin（1987）よりも拡大された解釈がされている。

ここで間投詞について触れておく。[10] 談話標識には間投詞由来の項目がある。1970年代以降、間投詞は機能面から分析されるようになり、話し手の感情を表す表現というだけでなく、談話やコミュニケーションにおける役割に焦点が当てられるようになった。Schiffrin（1987）で扱われる *oh*は、情報を受け取った合図として修正、質問、応答などを表す発話と共に用いて、進行中の情報の流れを管理する。*well* は先行発話と後続発話のつながりは現時点では保証されないが、話し手は談話の流れの首尾一貫性を維持する意思があることを示す。一方、先述の Schourup（1985）では、間投詞は話し手の心的状態を示唆するものであるとする。話し手は心に抱いていることを全て外に示さずに、発話のある時点での気持ちの重要性を伝える。

Schiffrin や Schourup などの会話分析的な研究は近年の IT 機器の発達と呼応し、新たに確立した「コーパス言語学」（corpus linguistics）の中で盛んに行われ、様々な研究成果が発表されている。以下、談話標識に関わるコーパス言語学の流れと、コーパ

ス言語学の集大成の一つとして出版された Biber *et al.*（1999）における談話標識の扱いについて見る。

3. 3.　コーパス言語学的アプローチ

Bublitz & Norrick（2011: 5）で述べられているように、語用論が特定の理論や特定の研究対象よりも言語使用に焦点を当てるなら、分析対象とするデータは非常に重要であり、本物の資料（authentic data）に基づく分析が求められる。そしてこのような資料では談話標識の使用例が多く見出せる。

コーパスに基づいた本格的な談話標識研究として、London-Lund Corpus を使って 'bottom-up' 式の分析を行った Aijmer（1989 / 1996）がある。それによると、談話標識はコミュニケーションにおいて不可欠な要素で、聞き手が文脈に基づいて発話を解釈する際の合図（signposts）として機能する。談話標識は多機能的であるにもかかわらず、話し手は談話標識の意味機能を知っていて、様々な文脈で適切に用いることができる。したがってコーパスを用いることで談話標識の定義や記述を精緻化し、談話における役割の理解につながる。さらに Aijmer（2002）では、コーパスに基づいた分析の利点と問題点を指摘した上で、文法化（grammaticalization）を含め各談話標識のコアの意味と談話機能の関係に焦点を当てている。

他に、英国英語と米国英語の *anyway*, *however*などを分析した Lenk（1998）、*like* の語用論的機能や文法化を分析した Andersen（2000）、複数の言語から成るコーパスを用いた対照言語学的な研究として Aijmer *et al.*（2006）、Fischer（2000）がある。コーパスを利用した共時的研究の他に、第 6 節で述べるような通時的研究の成果も見られるようになっている。

コーパスを用いて英国英語と米国英語の話し言葉と書き言葉を記述した Biber *et al.*（1999）は、特に口語的な資料で頻度が高い談話標識に注目し、以下のような定義を与えている。

> Discourse markers are particularly characteristic of spoken dialogue. They are words and expressions which are loosely attached to the clause and facilitate on-going interaction.（談話標識は特に口語的な談話に特徴的なものである。それらは、節にゆるやかに付随し、進行中の相互作用（やり取り）を首尾よく進める語や表現である。）　(Biber *et al.* 1999: 140)

Biber *et al.*は、特定の言語理論に立脚して一般化を図ったものではなく、もっぱら記述的な集大成として評価できるが、談話標識に関しては、さらに詳しく以下のように述べている。

Discourse markers are inserts which tend to occur at the beginning of a turn or utterance, and to combine two roles: (a) to signal a transition in the evolving progress of the conversation, and (b) to signal an interactive relationship between speaker, hearer, and message. Words and phrases which are discourse markers are often ambiguous, sharing the discourse marker function with an adverbial function. ... The items included as 'discourse markers' are open to debate. For our purposes the category includes interactive uses of *well*, *right*, and *now*, as well as of the finite verb formulate *I mean*, *you know*, and *you see*. Many other less frequent forms, such as *mind you* and *now then*, might also be regarded as discourse markers, as could some inserts primarily considered under other headings, such as *oh* in 14.3.3., and *okay* in 14.3.3.6 below.（談話標識は会話のターンや発話の初めに生じる傾向にある挿入語で、以下の２つの役割が結合されている：(a) 会話が展開していく過程での移行を合図する。(b) 話し手、聞き手、そしてメッセージの間の相互作用を合図する。談話標識に含まれる語は、しばしば談話標識的な機能と副詞的な機能を併せ持ち、曖昧である。…「談話標識」にどのような項目を含むかは、論争の余地がある。談話標識を論じるために、そのカテゴリーには、*I mean*, *you know* や *you see*などのような定形動詞を持つ決り文句の他に、*well*, *right* や *now*が相互作用的に用いられる場合も含む。*mind you* や *now then*などの頻度の高くない他の語句、また 14.3.3 の *oh*や 14.3.3.6 の *okay*のように主として他の見出しの下で考察される挿入語と同様に、談話標識と見なすことが可能であろう。）　(Biber *et al.* 1999: 1086)

3. 4.　語用論的アプローチ

発話行為理論や Grice の会話の協調の原理[11] に基づく語用論の議論の中で、談話標識が特に表立って議論されることはなかったが、Grice (1975 / 1989) の中で、"Bill is a philosopher and he is, *therefore*, brave." における *therefore*の機能が議論され、*therefore*は慣習的含意 (conventional implicature) を担う要素として位置づけられている。

Now I do not wish to allow that, in my favoured sense of "say", one who utters [1] will have *said* that Bill's being courageous follows from his being a philosopher, though he may well have said that Bill is courageous and that he is a philosopher. I would wish to maintain that the semantic function of the word "therefore" is to enhance a speaker to *indicate*, though not to *say*, that a certain consequence holds. ([1]（上記例文）の発話者は、私が好むところの「言う」という意味では、ビルが勇敢であることと哲学者であることを恐らく言ったのであろうが、哲学者であることからその結果ビルが勇敢であると「言った」ことになるだろうと認めたくない。'therefore' という語の意味機能は、話し手がある結果が成立しているということを「言っている」のではなく「示唆している」と主張したい。）

(Grice 1989: 21)

このように、語用論の中心的概念である含意（implicature）との関連で、本稿で問題とする談話標識がすでに議論されていたことは注目に値する。後述の関連性理論で中心課題の１つとなる事柄が Grice の研究の中で取り上げられていたのである。

一方、語用論の概説書として定評のある Levinson（1983）においても、談話標識についての記述が若干見られ、談話的ダイクシスを担う要素として位置づけている。

To return to straightforward issues in discourse deixis, there are many words and phrases in English, and no doubt most languages, that indicate the relationship between an utterance and the prior discourse. Examples are utterance-initial usages of *but, therefore, in conclusion, to the contrary, still, however, anyway, well, besides, actually, all in all, so, after all*, and so on. It is generally conceded that such words have at least a component of meaning that resists truth-conditional treatment (Grice, 1975; Wilson, 1975; Levinson, 1979b)[12]. What they seem to do is indicate, often in very complex ways, just how the utterance that contains them is a response to, or a continuation of, some portion of the prior discourse.（談話直示表現における直接的な問題に戻ると、英語においては、そして、間違いなくほとんどの言語において、発話と先行する談話の関係を示す語や句がある。例としては、発話の最初に来る *but, therefore, in conclusion, to the contrary, still, however, anyway, well, besides, actually, all in all, so, after all* などの使用がある。一般的に、そのような語は真偽条件の扱いを拒むような意味要

素を少なくとも持っている（Grice、1975; Wilson、1975; Levinson、1979b)。その働きはしばしば非常に複雑な方法で、それらを含む発話が先行談話の一部分に対する反応となっていたり、継続を示すものとなっている。）　(Levinson 1983: 87-88)

さらに、Grice の提唱した会話的公理（conversational maxims）と関連して、次のような記述が見られる。

Consider for example the English discourse particles *well, oh, ah, so, anyway, actually, still, after all*, and the like : these might be described as 'maxim hedges' that indicate for recipients just how the utterance so prefaced matches up to co-operative expectations.（例えば *well, oh, ah, so, anyway, actually, still, after all* などのような英語の談話辞を考えてみよう。これらは、聞き手にとって先行する発話がどのように協力的な期待に合っているかを示す「公理の垣根語」として記述することが出来るかもしれない。）　(Levinson 1983: 162)

このように、従来の語用論においても中心的な課題としては取り上げらなかったにせよ、特異な語用論的機能を持つ語彙項目として注目されていたことが指摘できる。また、これらの語句が命題の真偽値に直接関わるものではなく、聞き手に正確な発話意図を伝達するために発話の含意レベルで機能しているという分析は重要で、後に関連性理論で詳しく議論される各言語表現の持つ「言語的意味」の精緻化に影響を与えることになる。

また、Aijmer（2013）は、独自の言語変異的語用論（variational pragmatics）の立場から、会話の参与者の社会階級、民族的背景、性別、年齢、地域的な要因、テクストや活動（activity）のタイプ（公の会話、個人的な会話、対面の会話、電話の会話、授業、診察など）や話し手の役割なども考慮した分析が必要であるとする。[13]

４．関連性理論と談話標識

談話標識が理論言語学の表舞台で注目されるようになったのは、Sperber & Wilson が提唱した認知語用論の１つの関連性理論の登場のおかげであった。関連性理論の枠組みでは、談話接続語は文脈の選択と認知効果を制限することによって、関連性を探すガイド役を担うとしている（cf. Sperber & Wilson（1986 / 1995[2]）。本節では、特に Blakemore の一連の研究を追いながら、現時点における関連性理論での談話標識の

位置づけをまとめる。なお、関連性理論に立脚した談話標識研究には、Blakemore の他に、Blass（1990）. Rouchota（1998）, Unger（1996）, Andersen（1998, 2001）などがある。

4.1.　Blakemore の一連の研究とその評価

当初 Blakemore（Brockway）（1981）は、意味論と語用論のインターフエイスに関心があり、発話解釈に関わって意味論と語用論を繋ぐ存在として談話接続語（discourse connectives）に着目した。そして一連の語句が発話や文脈を結びつける際に「発話の語用論的解釈に意味論的制約を加える」ものとして位置づけた。関連性理論の発展に伴い、従来のような意味論と語用論の区別は必要でなくなり、言語表現は全て関連性（relevance）に貢献するという認知論的な観点から論じられることになった。「言語的意味」（linguistic meaning）は全て広く認知を反映したものであり、認知的意味をいかに位置づけるかが中心課題となり、議論の中で談話標識が注目されることになる。

ここで断っておかなければならないのは、関連性理論は談話標識、あるいは談話接続語を説明するための理論ではなく、それらを精査することにより、「言語的意味」がより厳密に規定されるようになったということである。また、関連性理論の中で問題にされた語句は一般に談話標識と称されるカテゴリーに属するが、全てが一様に共通の「言語的意味」を持っているとは結論づけられないことを明らかにした。

まず Blakemore（1987）において、談話接続語を吟味することにより、「命題の真偽値に関わる要素」と「発話解釈の算出のみに関わる要素」を区別した。「言語的意味」の下位区分として、いわゆる、「概念的意味」（conceptual meaning）と「手続き的意味」（procedual meaning）の区別の重要性を指摘した。さらに Blakemore（1992）において、改めて関連性理論の枠組で談話接続語の機能を整理し、「推意（implicature）に制約を課すもの」として、「関連性を生み出す文脈効果」（contextual effects）の観点から談話接続語を特徴付け、以下の３つに整理した（Blakemore 1992：136-142）。

①文脈含意を生み出す談話接続語（新情報と旧情報を組み合わせて導き出される）：*so*, *therefore*

②既存の想定の強化に関わる談話接続語（既存の想定を強める証拠を提示する）：*after all*, *besides*, *moreover*, *further*, *indeed*

③既存の想定を否定する談話接続語（新情報が旧情報と矛盾し、既存の想定が削除

される）：*however, still, nevertheless, but*

そして、これらが共通して「手続き的意味」に貢献しており、「概念的意味」との区別を強調した。しかし、この時点ですでに談話接続語の持つ複雑さに気づいており、それぞれの語句の詳細な分析が必要であることを指摘している。

Blakemore（1996）では、従来扱ってきた *but* や *so* 以外の項目として、*in other words* に代表される同格標識（appositive makers）の分析に取り組み、同格標識は *so* や *but* とは異なり概念的意味を持ち、「高次表意に制限を課すもの」で「言語的意味」に寄与するものとして位置づけた。このように談話標識の多様性に改めて気づき、分析の難しさを指摘している（cf. Blakemore 1996: 345-346）。Blakemore（2000）において、*but* と *nevertheless* の使い分けを精査することにより、さらに Blakemore（2002）では最も難解な *well* を射程に入れ、「手続き的意味」の再考が行われた。

従来の考え方では、「手続き的意味」は「推意に制約を課すもの」として規定されたに過ぎなかったが、「手続き的意味」は「（狭義の先行する言語的）文脈に対する制限を含め、発話解釈に関わる推論プロセスの全ての情報を含むもの」として、その概念が拡張された。広範囲の用法を持つ *well* の一般化を図る過程で、談話標識は「最小限の労力で発話解釈できるように文脈及び文脈効果を特定化し、文脈から生じる様々な推論の可能性についての選択を制限し、最適の関連性の達成に寄与することを合図する標識」という最も一般的な結論に至ったのである。[14] この結論の意味するところは、談話標識は言語表現の中で周辺的で特異な存在ではなく、他の言語表現と同様に、関連性理論の中で説明されるべきものとして位置づけられたということである。

以上が Blakemore の到達点であるが、この研究成果が関連性理論に取り込まれ、Wilson & Sperber（1993, 2012）では言語的に伝達される情報は次のように整理されている。[15] 以下に、主に本稿に関係する言語表現が①～⑤のどの言語的情報を伝えているかも併せて示す（cf. Ifantidou-Trouki（1992）, Wilson & Sperber（1993）, Sperber & Wilson（1986 / 1995²））。

<u>言語的に伝達される情報の種類</u>

linguistically encoded（言語的に記号化）

A) conceptually encoded（概念的に記号化）

a) contributes to explicatures（表意に貢献）

i) contributes to proposition expressed（表出命題に貢献）①

ii) contributes to higher-level explicatures（高次表意に貢献）②

b) contributes to implicatures（推意に貢献）

B) procedurally encoded（手続き的に記号化）

a) constraints on explicatures（表意を制限）

i) constraints on proposition expressed（表出命題を制限）③

ii) constraints on higher-level explicatures（高次表意を制限）④

b) constraints on implicatures（推意を制限）⑤

①内容語：名詞、動詞、様態副詞など

②発語内行為副詞、態度副詞、同格標識など

③代名詞

④一部の談話標識

(1)文尾に生じる *after all*, *you see*, *you know*, *actually*, *then* など（cf. 内田 2011）

(2)*huh* (attitudinal discourse particle), *eh* (question particle) など

(3)法標識

⑤談話連結語（談話標識）

ここで、談話標識に関する Halliday & Hasan (1976) や Schiffrin (1987) のいわゆる首尾一貫性基盤 (coherence-based) のアプローチと関連性基盤 (relevance-based) のアプローチの違いを記しておく。首尾一貫性基盤アプローチにおいては、発話自体が首尾一貫を持っているものと理解され、談話標識は主に談話の要素同士の関係を合図し、談話の首尾一貫性にどのように貢献するかを示す。一方関連性理論においては、発話理解は首尾一貫性を求めることによってではなく、最適の関連性を求めることによってなされる。発話理解は関連性基盤として位置づけられ、首尾一貫性は派生的なもの (derivative) となる。例えば、談話標識 *now* は両アプローチでどのように説明されるのであろうか。前者のアプローチの Schiffrin では、*now* は話題転換、下位的なトピックの導入、より大きな構造の中で新たな議論に移る場合など、文脈的な不連続 (discontinuity) が生じる時に用いられ、談話の首尾一貫性を維持するのに貢献する。一方後者のアプローチをとる Schourup (2011) では、既に非常に接近しやすい (highly accessible) 想定に関して注目に値する新たな文脈を構築するよう聞き手に促すといった手続き的制限を課すことになる。この *now* は述べられていることや導き出

される認知効果の新規性（newness）ではなく、文脈の選択に焦点を当てていると説明される。

なお、最近の関連性理論では、談話接続語（discourse connectives）は意図された認知効果（intended cognitive effects）の期待を操作する機能を担うとする（Wilson & Sperber 2012: 204-205）。[16]

4.2.　関連性理論とポライトネス、並びに交感的機能との関係

談話標識には対人関係調整に関わる機能を持つものがある。このようなポライトネス（politeness）や良好な関係を築くために用いられる言語表現の交感的機能（phatic communion）は社会学的な現象で、関連性理論のような認知語用論では扱えないとされてきた。[17]

しかし、Blakemore（1994: 56-58）は、伝達に関する認知理論の基本的な役割は伝達が社会的関係のダイナミクスにどのように影響するかを説明することにあり、したがって関連性理論はポライトネスなど、伝達の社会的側面に関する研究と両立するとしている。またŽegarac & Clark（1999a: 321, 323）は、交感的コミュニケーション（phatic communication）も射程に入れ、関連性理論で言う意図明示的伝達（ostensive communication）、すなわち、ある想定を聞き手に顕在的にしたいという「情報意図」（informative intention）と、情報意図を相手に伝えたいという「伝達意図」（communicative intention）の両方を持つ伝達と関わり、ある言語表現の交感的解釈は、非交感的解釈が関連性の原理に合わない場合にのみ導出されるとする。同様に、認知語用論的な立場に立つ Nishikawa（2010: 226）は、交感的コミュニケーションは話し手と聞き手が互いに良好な社会的関係を築いたり維持することを目指す意図明示的伝達の１つだとする。

交感的コミュニケーションでは、発話の言語的な意味よりも、話し手が聞き手に何かを述べるという事実がより重要なのである。つまり、言語表現のそのような機能は、発話で表される命題に関わるのではなく、話し手が意図明示的伝達において持っている伝達意図に主に作用する（Žegarac & Clark 1999a: 329, 331, 344; 1999b: 566）。

この見解に立つと、*oh*, *well*, *ah* などの間投詞由来の談話標識は、不同意、要求、拒否を表す発話の前で用いられ、主発話から生じる聞き手にとって好ましくない含意を削除するように聞き手を導き、しばしば聞き手と良好な関係を保ちたいというポライトネス、つまりŽegarac & Clark で言う交感的含意を生み出すのに貢献して、交感的コミュニケーションとして関連性を達成することになる（Nishikawa 2010: 239-44）。

なお、対人関係調整機能を持つ談話標識が談話において交感的機能を果たすことは、コーパスを用いた研究の Aijmer（1989 / 1996）でも指摘されている。たとえば、話し手の態度を表す *actually* はしばしば垣根表現（hedge）の機能を、*sort of* は発話の力を弱める機能を持つ。また、*oh, I mean* などが持つ発話順番保持（floor-holding）の機能も談話標識の交感的機能である。

5．Fraser のアプローチ

談話標識研究のアプローチとして、もっぱら談話標識そのものに焦点を当て研究を進めている Fraser の研究を取り上げる。

5.1. Fraser の基本的枠組み

Fraser（1996）では、一連の語句は独自のカテゴリーを形成するものと考え、共通して固有の語用論的意味を持つとして語用論標識（pragmatic markers）というカテゴリーを定め、基本的な機能を以下のようにまとめている。

> Specifically, I propose that this non-truth propositional part of sentence meaning can be analyzed into different types of signals, what I have called Pragmatic Markers (cf. Fraser 1990) correspond to the different types of potential direct messages a sentence may convey. These pragmatic markers, taken to be separate and distinct from the propositional content of the sentence, are the linguistically encoded clues which signal the speaker's potential communicative intentions.（具体的に言うと、文意の真偽値に関わらない命題部分は、様々な種類の合図に分析でき、それらを語用論標識（cf. Fraser 1990）と称し、文が伝達しているであろう様々なタイプの潜在的で直接的なメッセージと対応している。これらの語用論標識は、文の命題内容とは分離した別のものとして解釈され、話し手の潜在的な伝達意図を合図する言語的に記号化された手がかりである。）
>
> (Fraser 1996: 167-168)

さらに語用論標識は以下の３つに細分化されている（Fraser 1996: 169）。

①基本的語用論標識（basic pragmatic markers）：基本的なメッセージの発話の力を合図する。

②解説的語用論標識（commentary pragmatic markers）：基本的なメッセージについてコメントするメッセージを合図する。

③並列的語用論標識（parallel pragmatic markers）：基本的なメッセージに付け加えてメッセージを合図する。

これらの語用論標識と共に、第４の下位区分として談話標識（discourse markers）を設け、以下のように定義している。

Discourse markers signal the relationship of the basic message to the foregoing discourse. In contrast to the other pragmatic markers, discourse markers do not contribute to the representative sentence meaning, but only to the procedural meaning. They provide instructions to the addressee on how the utterance to which the discourse marker is attached to be interpreted.（談話標識は、先行する談話と基本的なメッセージの関係を合図する。他の語用論標識とは違い、談話標識は表示的な文の意味には貢献せず、手続き的な意味のみに貢献する。それらは聞き手に談話標識が付されている発話がどのように解釈されるかを聞き手に教える。）

(Fraser 1996: 169, 186)

さらに、談話標識は以下の４つに下位区分されている（Fraser 1996: 187-88）。

①話題転換標識（topic change markers）：話し手の考えでは、後続の発話は現在話している話題とは異なる。

a) I don't think we can go tomorrow. It's David's birthday.
Incidentally, when is your birthday?

b) *Speaking of* Martha, where is she these days?

back to my original point, *before I forget*, *by the way*, *incidentally*, *just to update you*, *on a different note*, *parenthetically*, *put another way*, *returning to my point*, *speaking of* X, *that reminds me*, etc.

②対比標識（contrastive markers）：後続の発話は、先行の発話に関連する命題を否定するか対照的なものである。

a) A: We can go now, children.

B: *But* we haven't finished our game yet.

b) John won't go to Poughkpeepsie. *Instead*, he will stay in New York.

c) Jane is here. *However*, she isn't going to stay.

all the same, anyway, but, contrariwise, conversely, despite (this / that), even so, however, in any case / event, in spite of (this / that), in comparison (with this / that), in contrast (to this / that), instead (of doing this / that), nevertheless, nonetheless, (this / that point) notwithstanding, on the other hand, on the contrary, rather (than do this / that), regardless (of this / that), still, that said, though, yet, etc.

③詳細表示標識（elaborative markers）：後続の発話は、先行の発話の内容を詳述する。

a) Take your raincoat with you. But *above all*, take gloves.

b) I think you should cool off a little. *In other words*, sit down and wait a little bit.

c) He did it. *What is more*, he enjoyed doing it.

above all, also, alternatively, analogously, and, besides, better, by the same token, correspondingly, equally, for example / instance, further (more), in addition, in any case / event, in fact, in other words, in particular, indeed, likewise, more accurately, more importantly, more precisely, more specifically, more to the point, moreover, on that basis, on top of it all, or, otherwise, similarly, that is, to cap it all off, too, what is more, etc.

④推論標識（inferential markers）：先行の発話から導き出せる結論を示す。

a) Mary went home. *After all*, she was sick.

b) A: Marsha is away for the weekend.

B: *So*, she won't be available Saturday.

accordingly, after all, all thing considered, as a consequence, as a logical

conclusion, *as a result*, *because of this / that*, *consequently*, *for this / that reason*, *hence*, *in this / that case*, *it can be concluded that*, *it stands to reason that*, *of course*, *on this / that condition*, *so*, *then*, *therefore*, *thus*, etc.

以下の例文はやや人工的なものであるが、上記の４つの標識が一文に現れていることが興味深い。談話標識（*However*）、解説的語用論標識（*quite frankly*）、並列的語用論標識（*Sir*）、基本的語用論標識（*I estimate*）の順で配列されている。

I appreciate that you are a member of the Police Benevolent Association and a supporter of the baseball league. *However*, *quite frankly*, *Sir*, *I estimate* that you were going a bit more than 86 miles per hour.　　(Fraser 1996: 169)

5.2.　Fraser（2009）における改編

Fraser（2009）においてそれまでの分類が改編され、大きな枠組みとしては全てを語用論標識（pragmatic markers）として統括している。並列的標識は解説的標識に吸収し、従来の基本標識、解説的標識、談話標識の３区分とともに、談話標識の幅広く談話を築き上げる働きを重視し、新たに談話マネジメント標識（discourse management makers）を設定し、以下のように下位区分される（Fraser 2009: 893)。

[談話マネジメント標識]

①談話構造標識（discourse structure markers）：後続の部分が談話の全体構造の中でどのような位置を占めているかを示す。（*first*, *then*, *in summary*, *I add*, etc.）

②話題方向付け標識（topic orientation markers）：後続の談話の話題に関する話し手の意図を示す。（*anyway*, *back to my original point*, *before I forget*, *but*, *by the way*, *incidentally*, *just to update you*, *on a different note*, *parenthetically*, *put another way*, *returning to my previous point*, *speaking of* X, *that reminds me*, etc.）

③注意喚起標識（attention markers）：話題の転換が起こっていることを示す。しばしば話題方向付け標識と共起するが、どのような転換が起こるかは示さない。（*ah*, *alright*, *anyway*, *anyhow*, *hey*, *in any case*, *in any event*, *now*, *now then*, *oh*, *ok*, *so*, *so good*, *well*, *well then*, etc.）

上記の下位区分を設けたことによって、少なくとも談話標識の下位区分の１つとして設けられていた話題転換標識は話題方向付け標識に吸収されることになる。従って、現時点での Fraser の分類は、以下のように整理し直すことができる。

語用論標識の分類

Pragmatic Markers

① Basic Markers

② Commentary Markers

③ Discourse Markers　a) Contrastive Markers

b) Elaborative Markers

c) Inferential Markers

④ Discourse Management Markers　a) Discourse Structure Markers

b) Topic Orientation Markers

c) Attention Markers

Fraser の一連の研究は正面から談話標識を捉え、最も包括的で詳細に論じているという点で評価できる。ただし、理論言語学の研究として見る場合には、用語上、関連性理論の Blakemore との共通点が見出され、中心的な機能を論じる際に「手続き的」(procedural) という用語を用いているが、Blakemore のような厳密さには欠け、真偽値に関与しない意味が手続き的意味であると短絡的に考えている (cf. Blakemore 1993, 1995, 1998)。Fraser の研究は、厳密な理論言語学的研究というよりはむしろ記述的研究として評価でき、例文を提示しながら具体的に個々の談話標識の機能を丁寧に説明していく手法は、我々の伝統的な語法研究ともよく馴染む。Fraser のアプローチは独自の枠組みで談話標識を分析しようとしているものの、従来の研究成果を統合しようとした折衷的な研究としての位置づけができるように思われる。

6．歴史語用論的アプローチ

Jucker (1995) によって事実上名称が定着した「歴史語用論」(historical pragmatics) は、社会構造の変化に伴って言語を用いる状況が変化することで、言語使用がどのように影響を受け、歴史的に変化していくかを研究していく分野である。その分析のためには過去の言語資料が必要となるが、古英語から近代英語までの様々なジャンルのテクストを集めたヘルシンキコーパス (Helsinki Corpus of English Texts) をは

じめとするコーパスの発達が言語資料の提供に貢献している。コーパスデータを通時的に観察することで、言語使用が時間の経過とともにどのように変化し発達したかを記述できるのである。このような手法で、歴史語用論の分野における文法化（grammaticalization）・主観化（subjectification）・間主観化（intersubjectification）といった研究課題と関わって、談話標識がその分析対象となり、通時的な研究が行われている（高田 *et al.* 2011: 30-31、75)。その先駆けとなったのが Jucker（1997）で、ヘルシンキコーパスを *OED*の資料で補足して *well*の分析を行った。こうした談話標識に対する通時的アプローチでは、以下のようなことが問題となる（Norrick 2009: 863)。

①ある項目がどのような経過を経て談話標識となったか。
②文法化のプロセスを通して語彙項目から談話標識が生じるという一般的なプロセスが談話標識にも認められるか。
③談話標識らしさは時間的経過に伴う段階性のある現象であると見なせるか。
④談話標識は多機能の傾向があるか。

上記の Jucker では，*well* 以外に、*in fact*, *indeed*, *besides*, *anyway*, *actually*, *cos* (*because*), *after all*, *now*, *oh*, *OK*, *I think*, *like*, *I mean*, *I say*などがこの手法によって分析されている（cf. Aijmer 1996, 1997; Ferrara 1997; Tabor & Traugott 1998; Schwenter & Traugott 2000)。こうした歴史語用論的アプローチの具体的なケーススタディーとして、以下、*in fact*と *anyway* の例を見ておきたい。

Schwenter & Traugott（2000）は、*in fact*は 1670 年頃に「実際において」の意で動詞を修飾する副詞として用いられ、1730 年頃には「確かに、しかしながら」の意で真実性に関する話し手の判断を示す認識的意味を持つ文副詞的用法が、1810 年頃には「実は」の意で前述の事柄よりもこれから述べることの方が大切であることを示す談話標識が現れたとする。

Tabor & Traugott（1998）は、*anyway* の談話標識の発達過程について概ね以下のように述べている。中英語ではおそらく動詞修飾語で、in any manner の意の様態副詞（M-anyway[=a manner adverb *anyway*]）であった。17 世紀中期に最初に資料に現れたと考えられるのが nonetheless の意の譲歩用法（C-anyway[=a concessive *anyway*]）であった。その後話題転換を示す用法（TR-anyway[=a topic resuming *anyway*]）が生じた。M-anyway の（in）anyway が C-anyway に展開する過程で in が消失して作用域（scope）が拡大し、さらに TR-anyway に展開する過程でも作用域が拡

大した。

これらの例に見られるように、歴史的に多くの談話標識は動詞を修飾する副詞からしばしば文副詞の用法を経て、談話的な多機能性を獲得していることが多い。談話標識は本質的に語用論的で、先行文と後続文とを結びつける上で、何らかの話し手の発話意図を反映していることには疑問の余地はないかもしれないが、問題は、談話標識機能を持つ副詞は文法化の一例と言えるかということである。

文法化とは、時間の経過の中で語彙項目が文法的・形態統語的に新しい文法的カテゴリーを獲得し、以前は全く示していなかったか、異なる文法的機能を獲得するプロセスである（cf. 高田 *et al.* 2011: 24-25）。文法化の特徴として初期の段階で挙げられていたのが脱範疇化、音韻的弱化、意味の漂泊化、主観化で、ある言語表現が語彙的要素から文法的要素に、すなわち、"from less grammatical to more grammatical" へと変化するプロセスとされた。これが伝統的見解（narrow view）である（Onodera 2011a: 19-20）。確かに談話標識の多くはこれらの特徴を備えているが、コーパスを通時的に分析すると、文中の副詞から文副詞、さらに談話標識へと作用域が拡大して、伝統的に文法化の特徴とされていた作用域の縮小に反する例が見られる。このようなことから、文法化とは，その作用するスコープの拡張であるという考え方もある。これが拡張的見解（scope expansion）で、*indeed*、*in fact*、*besides*のような英語の談話標識以外にも、日本語の「ガ、ダケド、デモ」やフランス語、ドイツ語、スペイン語においても同様の例が見受けられ、文法化の「一方向性」が否定されている（Onodera 2011a: 619-20、675）。このように、談話標識を文法化の一例とみなすと、文法化そのものについても再考が必要となっている。さらに文法化というより、談話標識が話し手の聞き手に対する態度に関わるようになる語用論化を支持する Aijmer (1996) などの見解もある（Onodera 2011a: 616-17）。

また、談話標識は先行発話と後続発話の関係についての話し手の判断や態度を示すので、ある表現が談話標識へと展開する過程では主観化が関わる。さらに、主観化を基盤にしてコミュニケーションの中で用いられる機能・意味を帯びて行く変遷の間主観化が関わる。[18] たとえば、発話内容を和らげる垣根表現としての *well*がその例である。主観化と間主観化が文法化のプロセスに付随して起こる例も見られるが、そもそも文法化とは独立したプロセスであるという見解もある（小野寺 2011b: 130）。

Linguistics 49 (2)(2011) では，'Grammaticalization, Pragmaticalization and (Inter)subjectification: Methodological Issues in the study of Discourse Markers' という特集が組まれ、歴史語用論的アプローチの最新の動向が伺える。小野寺

(2011b: 86) の言うように、談話標識の発達過程で文法化が起きるとか、間主観化が起きると一概に結論付けることは困難で、各表現について経験的にデータ分析を行った上で、それぞれの表現の歴史がどのようなプロセスに該当するかを判断すべきである。歴史コーパスの利用による記述・整理と理論の構築が待たれる。[19]

なお、本稿では主として欧米における談話標識研究の変遷を辿ってきたが、筆者を含め、多くの日本人研究者にとっても談話標識は大きな関心事であった。しかしながら、先行研究におけるそれぞれのアプローチを援用し、もっぱら個々の談話標識の用法記述に力が注がれたものが多く、体系的な研究は今後の課題として残っている。

７．おわりに

本稿の目的は、談話標識の体系的な研究として理論的な側面を扱い、これまで談話標識がどのように研究されてきたかを回顧し、それぞれの研究者のアプローチを明確にしつつ、談話標識という表現の意義を再確認することであった。

談話標識に対する考え方としては、大きく２つの立場が認められる。１つは文を越えた談話で機能するという側面を重視し、談話標識が首尾一貫性（coherence）にどのように貢献するかを中心に考えるアプローチであった。もう１つの立場は、話し手と聞き手がコミュニケーションを行う際に、話し手はどのような発話意図を持って発言しているのか、また聞き手は発話意図をどのように推測しながら発話解釈を行うのかといった側面から談話標識を特徴づける（認知）語用論的アプローチであった。

談話標識は、当初、命題内容からは周辺的な要素とみなされ、言語分析の中心的課題として扱われることがなかったが、言語分析の対象が文から幅広い談話へ、文レベルの文字通りの意味から話者の発話意図を含めた幅広い語用論的意味へ拡大されていく中で、その重要性が明らかとなってきた。そして、それぞれの言語分析アプローチの中で、談話標識がこれらのアプローチの理論的発展に貢献してきたのである。さらなる段階で、談話標識そのものを主たる分析対象として体系化しようとする流れとなってきている。

この体系化を図ろうとする際に大きく立ちはだかる問題は、一言でいうと談話標識の「多種多様性」(diversity) である。たとえば、談話標識は単一の品詞に収まらず、前置詞句や間投詞、レキシカルフレイズ (lexical phrase) をも含むすべての談話標識が共通の意味的・機能的特徴を持つわけではないということなどが挙げられる（この点については、本稿の続編となる次稿で詳述する)。どのような表現を談話標識研究の

射程に入れるのかということにも大きく左右されるが、談話標識の名が示すように、「文レベルを越えた談話と関わり、意味解釈に関して何らかの合図をする標識」と見なすことができる要素の徹底的な記述を試みようとすると一筋縄ではいかないのである。しかしながら、談話標識の理解のためには、そのような多種多様性を素直に受け止め、様々な観点から眺めていくことが肝要であると思われる。

本稿を談話標識研究の理論編として位置づけるならば、その実践編として、改めて談話標識の特徴をまとめるとともに、その分析方法を具体例と共に議論していく必要があろう。そうした課題に取り組むのが、次稿である。

＊本稿は、基本的な談話標識の約 50 項目を記述した『英語談話標識用法辞典』（仮題）[2015 年刊行予定]の基盤となる論考で、その Appendix 1 に収録される予定である「談話標識研究の歩み」をさらに精緻化・詳細化したものである。談話標識の個々の機能や用法等と併せ、同書を参照されたい。

注

1 「談話標識」の名称については様々なものが用いられてきた。主だったものを挙げる[cf. Brinton (1996), Takahara (1998), Jucker (1997), Schourup (1999) など]：(1) discourse ～：connective, connector, marker, modal, modality indicator, operator, particle, etc. (2) pragmatic ～：expression, formative, marker, particle, etc. (3)その他：attitude marker, boundary marker, confirmation seekers, conjunctive adverb, connective, contextulization cue, editing (self-correction) marker, expressive particle, filler, frame marker, hedging device, half-conjunction, hesitation marker, hesitator, initiator, intimacy marker, interjection, particle, pop marker, prompter, repair marker, softening connective, starter, topic switchers, turn-takers, etc. 様々な名称そのものが談話標識研究の発展段階やそれぞれの研究アプローチを反映している。他方、談話標識の多機能性、位置づけの不安定さを反映しているとも言える。これらのうちで pragmatic [discourse] particles が好んで用いられた時期もあったが、現在では discourse markers が定着したようである。訳語としても「談話辞」はあまり用いられなくなってきた。

2 Halliday (1985 / 1994[2]) では、接続語は観念的意味から連結的意味、さらに対人関係的意味を持つように展開するとしている。

3 コミュニケーションの新たな段階を示す *now*、ためらいを表す *well*、全てのこと

を考慮すると今述べたことは理にかなっていることを示す *after all*などがこれに含まれる。

4 Halliday & Hasan は、文章が集まってテクストを構成するには首尾一貫性が保たれる必要があるとする。首尾一貫性を維持する手段としては、テクストの内容的な要素の他に対人関係的な要素（ムード、モダリティ、強調、その他に話し手が発話の場面に関わる際の様々な形式）がある。結束性と首尾一貫性を比較すると、首尾一貫性が保たれていれば結束性がなくてもテクストは成立するが、その逆は不可能である。

5 こうした Halliday の研究を受けて、その中心的な概念である結束性や首尾一貫性を基に、心理言語学的な立場からも新たな議論が展開されている。

6 Schourup（1985: 18）では'evincive'という語がキーワードとして用いられており、以下のように定義されている：EVINCIVE: a linguistic item that indicates that at the moment at which it is said the speaker is engaged in, or has just then been engaged in, thinking; the evincive item indicates that this thinking is now occurring or has just now occurred but does not completely specify its content. [cf. evince: to show a feeling or quality very clearly in what you do or say.—*LD*[3]]

7 bracket は社会学者 Goffman（1974）の概念で、談話を含むあらゆる社会構造においてカッコ付け（bracketing）が見られるとする。

8 談話標識が意味論的・語用論的に談話の首尾一貫性にどのように貢献するかに関する論文には、他に Schiffrin（2000）、Redeker（1991）、Lenk（1998）などがある。

9 Redeker（1991）は Schifrrin（1987）を修正する形で、談話標識という用語を避け談話の首尾一貫性に関わる一連の語句を次のように定義する談話操作語（discourse operators）という用語を用いている: A discourse operator is a word or phrase — for instance, a conjunction, adverbial, comment clause, interjection — that is uttered with the primary function of bringing to the listener's attention a particular kind of linkage of the upcoming utterance with the immediate discourse context.（談話操作語とは、例えば、接続詞、副詞的語句やコメント節、間投詞など、直接的な談話的文脈とこれから発話される発話のある特定的な結びつきを聞き手に注意喚起するといった主たる機能を持つ語、あるいは、句である。）(p.1168)。この定義に従うと、'deictic' な意味を担う時間副詞としての *now*や *then* を含むことになり、*let me tell you a story*, *as I said before*, *since this is so*

などの節レベルの言語表現は除かれることになる。談話操作語は次の３つのレベルで機能すると考えている：観念的構造（ideational structure）、修辞的構造（rhetorical structure）、継起的構造（sequential structure）。

Schiffrin（1987）の機能レベルと比較すると、情報状態（information sate）と参与者の枠組み（participation framework）は個々の発話に関わり、他の発話と発話の関係を表す他の３つのレベルとは異なるものとしている。

10 間投詞の談話における機能を分析した研究には次のようなものがある。James（1973）は生成意味論の枠組みで、間投詞の意味は複雑であるが、発話における統語的振舞いで説明可能であるとし、コアとなる意味を提示した。Bolinger（1989）は、間投詞の機能の理解にはジェスチャーと音調が重要な役割を担うとした。Aijmer（1996）はコーパスを用いて、*oh*のコアとなる意味と談話における機能を論じている。他に首尾一貫性基盤（coherence-based）のアプローチでは Redeker（1991）、関連性理論の枠組みでは Wharton（2000, 2003）、Nishikawa（2002、2007）などがある。

11 会話を首尾よく進めるために、参与者は協調の原理（cooperative principle）「会話における自分の貢献を、それが生ずる時点において、自分が参加している話のやりとりの中で合意されている目的や方向性から要求されるようなものにせよ」（今井 2011: 190）を守らなければならない。この原理には次の４つの公理（maxims）がある。(1)量：過不足なく適切な量の情報を示せ (2)質：真実だと思っていることを話せ (3)関連性：関連のあることを話せ (4)様式：明確に話せ。

12 Wilson, D. 1975. *Presupposition and Non-Truth Conditional Semantics.* New York: Academic Press. 並びに、Levinson, S.C. 1979b. 'Pragmatics and social deixis.' *Proceedings of the Fifth Annual Meeting of the Berkley Linguistic Society,* 206-23.

13 一例をあげると、*well*は日常会話ではためらいを示すなど、通例攻撃的なニュアンスはない。しかし、たとえば法廷で用いられる場合は機能が異なることがある。話し手が検察官ならば、その地位に伴う権威を示すような（authoritative）機能や攻撃的なニュアンスを持ち、証人ならば検察官の発言を否定したり、異なる意見を述べて強い反論の態度を示すことがある。

14 Wilson & Sperber（2012: 200-205）によると、関連性理論では談話接続語は「橋渡し」（bridging）という現象を含む文の解釈に影響を与える可能性があるとする。談話接続語を加えることによって特定の認知効果を得られるようになり、その結果、

そのような効果を得るのに必要な背景となる想定に接近できる可能性（accessibility）を高めることになる。具体例として、以下の(i)、(ii)において、各例の伝達される意味の相違に注意されたい（p.204）: (i) a. I prefer Edinburgh to London. I hate the snowy winters. b. I prefer Edinburgh to London. *However*, I hate the snowy winters.[the snowy winters は、a.ではロンドン、b.ではエジンバラの冬だと解釈される可能性が 100%である。] (ii) a. I prefer Italy to England. I hate the pasta there. b. I prefer Italy to England. *However*, I hate the pasta there. [there は a.では英国だと解釈される可能性が 80%、b.ではイタリアだと解釈される可能性が 100%である。]

15 関連性理論においては、文脈（context）とは狭義の言語的文脈のみならず、発話の理解にあって発話の内容と共に推論（inference）の前提として用いられ、結論を導く役割をする想定（assumption）すべてを含む概念として用いられる。また、関連性理論で言う推意[あるいは含意]（implicature）は、理論的枠組みにおける表意（explicature）と対で理解されるべき概念で、後者は Grice の言う 'what is said' 必ずしも一致しておらず、結果的に、厳密に言うと Grice に端を発する語用論における含意（implicature）とは一致しない。また、Grice の言う慣習的含意（conventional implicature）と会話的含意（conversational implicature）のような区別は存在しない。

16 発話によって伝えられる情報には、意図明示的（ostensively）に伝達されるものと、そうでないものがある。前者には言語的に伝達されるものと非言語的に伝達されるものがあり、言語的に伝達されるものには言語的に記号化されるものとそうでないものがある。詳細は Wilson & Sperber（1993, 2000）。

17 文化人類学者 Malinowski（1923）の概念。

18 Traugott（2011: 60）は、主観化と間主観化を以下のように述べている。

subjectification: the recruitment of meanings to express Speaker's self and attitudes, including attitudes to text-creation in the sense of discourse-management.

intersubjectification: recruitment of meanings to express Speaker's acknowledgement of the Addressee and desire to maintain social exchange with Addressee.

また、主観化と間主観化は連続体で段階があり、言語によって表し方が異なる。

19 Brinton（2010: 287-93）では、さまざまな語句の談話標識としての機能が生じた

時期について述べている。本書で扱う談話標識に関して記すと、古英語では *then*、中英語では *now*、*ah*、この時期に特徴的に現れた挿入節（parenthetical clause）を談話標識として用いた *you know*、*you see*、説明を導入する *I mean*、初期近代英語（1,500-1,700）では *why*、*oh*、*in fact*、*actually*、*besides*、正当化を示す *anyway*, *look*、自己修正の *I mean*, *well*、後期近代英語（1,700-1,920）では *after all*、文頭で譲歩を表したり話題再開の *anyway*、*of course*、*mind*（*you*）があげられている。

参考文献

Aijmer, K. 1989 / 1996. *Conversational Routines in English: Convention and Creativity*. London: Longman.

—. 1997. '*I think*—an English modal particle.' In T. Swan and O.J. Westvik (eds.), *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives.* Berlin: Mouton de Gruyter. 1-47.

—. 2002. *English Discourse particles: Evidence from a corpus.* Studies in Corpus Linguistics. Amsterdam: John Benjamins.

—. 2011. '*Well I'm not sure I think...*: The use of *well* by non-native speakers.' *International Journal of Corpus Linguistics* 16(2), 231-54.

—. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Aijmer, K., A.Foolen and A-M.Simon-Vandenbergen. 2006. 'Pragmatic markers in translation: a methodological proposal.' In K. Fisher (ed.), *Approaches to Discourse Particles.* Amsterdam / Tokyo: Elsevier. 101-14.

Andersen, G. 1998. 'The pragmatic marker *like* from a relevance-theoretic perspective.' In A.H. Jucker and Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Descriptions and Theory.* P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 140-70.

—. 2000. 'The role of the pragmatic marker *like* in utterance interpretation.' In G. Andersen and T. Fretheim (eds.), *Pragmatic Markers and Propositional Attitude.* P&B ns.79. Amsterdam: John Benjamins. 17-38.

—. 2001. *Pragmatic Markers and Sociolinguistic Variation: A Relevance-Theoretic Approach to the Language of Adolescents.* P&B ns.84. Amsterdam: John Benjamins.

Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English.* London: Longman.

Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance.* Oxford: Blackwell.

—. 1992. *Understanding Utterances.* Oxford: Blackwell.

—. 1993. 'The relevance of reformulations.' *Language and Literature* 2(2), 101-120.

—. 1994. 'Relevance, poetic effects and social goals: a reply to Culpeper.' *Language and Literature* 3(1), 49-59.

—. 1995. 'Relevance Theory.' In J. Verscheuren et al. *Handbook of Pragmatics.* Amsterdam: John Benjamins. 443-52.

—. 1996. 'Are Apposition Markers Discourse Markers?' *Journal of Lingusitics* 32, 325-347.

—. 1998. 'The context for so-called "discourse markers".' In K. Malmkjær and J. Williams (eds.), *Context in language learning and language understanding.* Oxford: Cambridge University Press. 44-59.

—. 2000. 'Indicators and Procedures: *Nevertheless* and *But*.' *Journal of Linguistics* 36, 463-86.

—. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning.* Cambridge: Cambridge University Press.

Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala.* Cambridge: Cambridge University Press.

Bolinger, D. 1989. *Intonation and Its Uses: Melody in Grammar and Discourse.* Stanford: Stanford University Press.

Brinton, L.J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions.* Berlin: Mouton de Gruyter.

—. 2010. 'Discourse markers.' In A. Jucker and I. Taavistsainen (eds.) *Historical Pragmatics.* Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 285-34.

Brockway, D. 1981. 'Semantic constraints on relevance.' In P. Herman, M. Sbisà and J. Verchueren (eds.), *Possibilities and Limitations of Pragmatics.* Amsterdam: John Benjamins. 57-58.

Bublitz, W. and N.R. Norrick (eds.). 2011. *Foundations of Pragmatics.* Berlin / Boston: Mouton de Gruyter.

Carston, R. and S. Uchida. 1998. *Relevance theory: applications and implications.*

P&B ns.37. Amsterdam: John Benjamins.

Ferrara, K.W. 1997. 'Form and function of the discourse marker *anyway*: Implications for discourse analysis.' *Lingua* 35, 343-378.

Fischer, K. 2000. *From Cognitive Semantics to Lexical Pragmatics: The Functional Polysemy of Discourse Particles.* Berlin: Mouton de Gruyter.

—.(ed.). 2006. *Approaches to Discourse Particles.* Studies in Pragmatics 1. Amsterdam / Tokyo: Elsevier.

Fraser, B. 1990. 'An approach to discourse markers.' *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.

—. 1996. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics* 6(2), 167-190.

—. 1999. 'What are discourse markers?' *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.

—. 2006. 'Towards A Theory of Discourse Markers.' In K. Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles.* Studies in Pragmatics Series 1. Amsterdam / Tokyo: Elsevier. 189-204.

—. 2009. 'Topic Orientation Markers.' *Journal of Pragmatics* 41, 892-98.

Fuller, J.M. 2003. 'The influence of speaker roles on discourse marker use.' *Journal of Pragmatics* 35, 23-45.

Goffman, E. 1974. *Frame Analysis.* Cambridge, MA.: Harvard University Press.

Grice, H.P. 1975. 'Logic and Conversation.' In P. Cole and J.L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3, Speech Acts.* New York: Academic Press. 41-58. reprinted in Grice, H.P. (1989), 22-57.

—. 1989. *Studies in the way of words.* Cambridge, MA.: Harvard University Press.

Halliday, M.A.K. 1985 / 1994[2]. *An Introduction to Functional Grammar.* London: Arnold.

Halliday, M.A.K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman.

廣瀬　浩三. 1986.「談話現象の記述に向けて」『島根大学法文学部紀要文学科編』9(2), 1-25. 島根大学法文学部文学科.

—. 1988.「英語の談話修正表現について」六甲英語学研究会（編）『現代の言語研究』263-274. 金星堂.

—. 1989.「談話辞 *anyway*の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 山口書店.

—. 1993.「談話方策の一端を担う like」衣笠・赤野・内田（編）『英語基礎語彙の文法』214-223. 英宝社.

—. 1997. Love Means Never Having to Say "What do you mean?" —英語におけるメタ言語的活動の諸相（1）—島根大学法文学部紀要『島大言語文化』4, 41-74. 島根大学法文学部.

—. 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』287-295. 大修館書店.

—. 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50. 英語語法文法学会.

—. 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol.CXLVII, No.7, 466-467. 研究社.

—. 2003. 「関連性理論から見た談話標識」島根大学法文学部紀要『島大言語文化』14, 1-45. 島根大学法文学部.

—. 2008. 「レキシカルフレイズの語法」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第3号, 97-110. 島根大学外国語教育センター.

—. 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-28. 島根大学外国語教育センター.

Ifantidou-Trouki, E. 1992. 'Sentential adverbs and relevance.' *Lingua* 90, 69-90。

今井邦彦. 2011.『語用論への招待』東京: 大修館.

James, D. 1973. *The Syntax and Semantics of Some English Interjections.* Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.

Jucker, A.H. (ed.). 1995. *Historical Pragmatics. Pragmatic Developments in the History of English.* P&B ns. 35. Amsterdam: John Benjamins.

—. 1997. 'The discourse marker *well* in the history of English.' *English Language and Linguistics* 1(1), 91-110.

Jucker, A.H. and S.W. Smith. 1998. 'And people just you know "wow": Discourse Markers as Negotiating Strategies.' In A.H. Jucker and Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Description and Theory.* P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 171-201.

Jucker, A.H. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory.* P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.

Lam, P.W.Y. 2009. 'Discourse Particles in Corpus Data and Textbooks: The Case of *well.*' *Applied Linguistics* 31(2), 260-81.

Lenk, U. 1998. *Marking Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in*

English. Tubingen: Gunter Narr Verlag.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics.* New York: Cambridge University Press.

Malinowski, B. 1923. 'The problem of meaning in primitive languages.' In C.K. Ogden and I.A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning.* London: Routledge and Kegan Paul. 296-336.

松尾文子. 1989.「Discourse Marker の一考察（1）」『英米文学研究』第 25 号, 119-131. 梅光女学院大学英米文学会.

—. 1990.「Discourse Marker の一考察（2）」『英米文学研究』第 26 号, 137-147. 梅光女学院大学英米文学会.

—. 1991.「Discourse Marker の一考察（2）」『英米文学研究』第 27 号, 139-148. 梅光女学院大学英米文学会.

—. 1993.「談話接続語としての so」衣笠・赤野・内田（編）『英語基礎語彙の文法』193-202. 英宝社.

—. 1994.「推論を表す接続語 then について」『語法研究と英語教育』16, 50-58. 山口書店.

—. 1997.「推論を表すつなぎ語 so と then」『英語語法文法研究』4, 135-147. 英語語法文法学会.

—. 1998.「推論的応答で用いられる then の用法」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』296-304. 大修館書店.

—. 2000a.「談話接続語 but の機能」『英語語法文法研究』7, 51-62. 英語語法文法学会.

—. 2000b.「談話管理の機能を持つ接続語」『英米文学研究』第 36 号, 203-222. 梅光女学院大学英米文学会.

—. 2001a.「間投詞的な機能を持つ接続語」『英語表現研究』18, 19-27. 日本英語表現学会.

—. 2001b. '*But and ga. demo.*' 『英米文学研究』第 37 号, 19-31. 梅光女学院大学英米文学会.

—. 2003.「but の用法『否定』の概念の展開」『英語表現研究』20, 11-19. 日本英語表現学会.

—. 2007a. 「談話辞 but の用法の展開と対応する日本語」『六甲英語学研究』10, 241-255. 六甲英語学研究会.

—. 2007b.「at least の語法と類義表現」『英米文学研究』第 40 号, 1-13. 梅光学院大

学英米文学会.

—. 2008.「談話辞 actually の機能の展開」『論集』第 41 号, 78-88. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2009.「英語の談話標識の特性 及び 日本語との比較」『論集』第 42 号, 30-44. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2010a.「談話標識の特質：単独で用いられる談話標識を手がかりに」『論集』第 43 号, 43-54. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2010b.「談話構成と表現表の日英語比較：談話標識 now と and を中心に」『梅光言語文化研究』第 1 号、5-23. 梅光学院大学国際言語文化学会.

—. 2011a.「談話標識の談話戦略的使用」『論集』第 44 号, 63-79. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2011b.「日本語では表現されない談話標識 and」『梅光言語文化研究』第 2 号, 1-17. 梅光学院大学国際言語文化学会.

—. 2012a.「談話の構造と談話標識」『梅光言語文化研究』第 3 号, 1-16. 梅光学院大学国際言語文化学会.

—. 2012b.「話法と談話標識」吉村・須賀・山本（編）『ことばを見つめて』169-178. 英宝社.

—. 2013a.「談話の展開を合図する談話標識」『論集』第 46 号、1-16. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2013b.「推論結果を表す談話標識 so と then：先行発話に対する話し手の態度の違い」『梅光言語文化研究』第 4 号、1-19. 梅光学院大学国際言語文化学会.

西川眞由美. 2002. 'Interpretive Use of Interjections.'『人間文化研究科年報』第17号、169-181. 奈良女子大学大学院人間文化研究所.

Nishikawa, M. 2007. 'Interpreting Interjections: A perspective of relevance theory.' *22 Essays in English Studies: Language, Literature and Education* 65-88. Tokyo: Shohaku-sha.

—. 2010. A *Cognitive Approach to English Interjections.* Tokyo: Eihosha.

Norrick, N.T. 2009. 'Pragmatic markers: introduction.' *Journal of Pragmatics* 41, 863-65.

Onodera, N. 2011a. 'The grammaticalization of discourse markers.' In H. Narrog and B. Heine (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization.* Oxford: Oxford University Press. 612-24.

小野寺典子. 2011b.「歴史語用論の成立・現在、そして今後へ」『日本語学』30（14）, 123-36.

Redeker, G. 1991. 'Linguistic markers of discourse structure.' *Lingua* 29, 1139-1172.

Rouchota, V. 1998. 'Connectives, coherence and relevance.' In V. Rouchouta and A.H. Jucker (eds.), *Current Issues in Relevance Theory.* P&B ns. 58. Amsterdam: John Benjamins. 11-57.

Rouchota, V. and A.H. Jucker (eds.), 1998. *Current Issues in Relevance Theory.* P&B ns. 58. Amsterdam: John Benjamins.

Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

—. 2001 / 2004. 'Discourse markers: language, meaning and context.' In D. Schiffrin, D. Tannen amd H.E. Hamilton (eds.), *The Handbook of Discourse Analysis.* Oxford: Blackwell. 54-75.

Schourup, L. 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation.* New York & London: Garland.

—. 1999. 'Discourse markers.' *Lingua* 107, 227-265.

—. 2000. 'Homing in on Discourse Marker Meaning.'『英語語法文法研究』7, 5-17. 英語語法文法学会.

—. 2001. 'Rethinking *well.' Journal of Pragmatics* 33(7), 1025-1060.

—. 2011. 'The discourse marker *now*: A relevance-theoretic approach.' *Journal of Pragmatics* 43, 2110-29.

Schourup, L. and T. Waida. 1988. *English Connectives.* Tokyo: Kuroshio-shuppan.

Schwenter, S.A. and E.C. Traugott. 2000. 'Invoking scalarity: The development of "in fact."' *Journal of Historical Pragmatics* 1(1), 7-25.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986 / 1995[2]. *Relevance: communication and recognition.* Oxford: Blackwell.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage.* Third Edition. London: Oxford University Press.

Tabor, W. and E.C. Traugott. 1998. 'Structural scope expansion and grammaticalization.' In Ramat, A. G.and P.J. Hopper (eds.), *The Limits of Grammaticalizaion.* Amsterdam: John Benjamins. 229-72.

高田博行, 椎名美智, 小野寺典子（編著）. 2011.『歴史語用論入門：過去のコミュニケー

ションを復元する』東京: 大修館.

Takahara, P.O. 1998. 'Pragmatic functions of English discourse marker *anyway* and its Corresponding contrastive Japanese discourse markers.' In A.B. Jucker and Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers: Descriptions and Theory.* P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins. 321-46.

Traugott, E.C. 2011. 'On the Function of Adverbs of Certainty Used at the Periphery of the Clause.'『語用論研究』13, 55-74. 日本語用論学会.

内田聖二. 2011.『語用論の射程：語から談話・テクストへ』東京: 研究社.

Unger, C. 1986. 'The scope of discourse connectives: implications for discourse organization.' *Journal of Linguistics* 32, 403-39.

Van Dijk, T. 1977. *Text and Context: Explorations in the semantics and pragmatics of discourse.* London: Longman.

—. 1979. 'Pragmatic Connectives.' *Journal of Pragmatics* 3(5), 447-456.

Wharton, T. 2000. 'Interjections, Language and the "Showing" / "Saying" Continuum. ' *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 173-213.

—. 2003. 'Interjections, language, and the "showing" / "saying" continuum.' *Pragmatics and Cognition* 11(1), 39-91.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. 'Linguistic form and relevance.' *Lingua* 90, 1-25.

—. 2000. 'Truthfulness and Relevance.' *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 215-57.

—. 2012. *Meaning and Relevance.* Cambridge: Cambridge University Press.

Žegarac, V. and B. Clark. 1999a. 'A cognitive account of phatic communication.' *Journal of Lingusitics* 35, 321-46.

—. 1999b. 'Phatic communication and Relevance Theory: a reply to Ward & Horn.' *Journal of Linguistics* 35, 567-77.